

飯田樞隱遺徳顕彰会は、兵庫県教育委員会から許可された、公益を目的とする財団法人です。医師であり、禅思想の普及に生涯を捧げた樞隱老師の精神を受け継ぎ、東洋的なものの見方・考え方、そして生き方について、坐禅を通して学ぶ開かれた集まりです。

老師は「人は、己(おのれ)を忘れることによって、自己と宇宙を一体とし、生死(しよじ)を超越して生きる道を覚(は)る。その志は、坐禅によって徹底できる」と、説きました。この言葉が、いまほど私たちの心に響く時代はありません。

老師の真髓を、一言でいえば「菩提心」です。「自未得度先度他」つまり、自分のことより、まず人さま(他)を先に、という慈悲のこころです。顕彰会も、この心を大切にして広く人々のために活動したいと願っています。

なお、顕彰会は坐禅会、研究会のほかに、講演会開催、老師の遺された蔵書「樞隱文庫」の閲覧などの事業も行っています。



飯田樞隱老師
(樞隱文敬和尚)

文久3年(1863)山口県の花岡で生まれました。父・片野興兵衛は、戦国大名・大内義隆の末裔。15歳のとき、大阪の適塾(緒方洪庵塾)の塾頭・飯田柔平の養子となり医学を学びはじめました。明治18年東京大学医科卒業、駒込病院に勤務しましたが、この年コレラが大流行し、巷には死屍累々、世の無常を感じて、安芸仏通寺の香川寛量和尚のもとに参禅しました。19年臘八晝大、師より印可されました。

翌年独立して医院を開業、しかし求法の念やみがたく、牛込道林寺に鄧州(南天棒)和尚を訪ね、山上有山を了知師資の礼をとり、医学の研究に専念するとともに、全国諸方を歴参しつつ求道、明治36年鄧州和尚が西宮海清寺に移られたので西宮に医院を移し、和尚の化を助けました。大正7年58歳のとき、広島府の禅林寺の一枝軒敬峰和尚から達翁系(心印)が、春養一文常一敬峰一文敬(樞隱)へと伝えられました。明治11年60歳で弟子たちに請われ剃髪、石川県大前聖寺後堂、大阪・池田市の大廣寺師家に迎えられました。

昭和2年65歳のとき、貴族院議員中心の禅会「慧照会」で開講したのを機に、興禅護国会の師家に請せられ、「碧巖録」を提唱。当時の内閣諸侯や朝野の名士の来聴が数百人にも及びました。

昭和6年高槻市に念願の『少林窟道場』を開きましたが、体調はすぐれず、法子藤文春翁を少林窟2世として各地の禅会を代講させました。しかし10年6月藤文和尚が遷化。これも時節因縁かと、独語された老師は「日華事変」が勃発した昭和12年9月30日入寂、75歳の生涯でした。その年の年賀状に「思ひ入る心のうちに道しあらばよしや吉野の山ならずとも」と、その境涯をみごとに詠んでいます。



老師の書「無」



坐禅会は、
毎月第2・第3日曜の
朝10時から午後2時
まで、昼食をはさみ、1回
45分で3回坐ります。
研究会は参加
自由です。

顕彰会の建物は、老師の親族(近藤家)の住宅として、昭和10年代に建てられました。坐禅道場としては、1985(昭和60)年から利用されています。

2011年春、改修工事を終えましたが、大正から昭和にかけての住宅として文化財的価値のある貴重な建築物です。



1階和室



1階洋室



茶室



庭



【阪急・芦屋川駅】から
・「高座の滝」へのコースを
歩み、徒歩約15分。
・タクシーで、約5分。